

東照傳再加下篇

一各東照傳武徳集成

内閣文庫	
番號	和 33061
冊數	52 ( 38 )
函號	158 293

内閣文庫	
和書類	三五六一號
架	五二冊
函	一四架



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



15/151

清

東

東照傳身記卷之三

目錄

慈皇現事附大坂牧植事

洛陽廟啟事是日瀧路石碣文事

大仏信賴御立修心事

行朝大元後御向渡及岸事後事

心

東洋傳事加篇卷之三

三日月出現ありち候哉

慶

長年二月より東

洋の事ありて

むのふ世人の心を悦ばしむ

来船の儒者

武備志考の

中尾

君西

其不相和度お連をてが春迄平定  
有徳なりしつり今も度西ふしつり  
殺る者多かりし其れつり所は  
難し東より出まふとありし  
西より人々し秋かりおし  
魁ありし解りし何れも  
かり東より利ありし  
ありし魁ありし難し  
しつりしつり利ありし  
若く東西

華起り其の度軍ありし東必勝川  
所は西より利ありし  
しつりしつり若く秋ありし  
必和勝とありし  
征伐の度ありし  
かり方角ありし  
之頃方々勝ありし  
本々勝川西ありし  
かり若くしつり

乱中... 諸人... 川... 殿中... 所... 周... 北...

少... 皆... 通... 之... 尤... 志... 君...

... 殿... 所... 周... 北... 少... 皆... 通... 之... 尤... 志... 君...





の出現を疑はるる日ありの天變り  
かり事のおんまゝと人言呼ぶ處  
たし今年伊勢踊り廣氏飾異  
取竹等と縁結と被系と歌詠と  
習川より踊りゆへ伊勢踊り都部  
殆遍と述ぶ踊り流布と人  
在と云く伊勢を祀る事あり  
云是人の信と常事と云語に依り  
敬るもの故のこ

大御所は厚く守りて誠り定む  
巫女不祥の事あり王女に所禁りて  
我神と云ふ心ありて  
止し終ふ自古及の能言所の言重  
の不載入るるともいふ事なり  
此妖打つてまじき事ありて  
あまこと世もいふ事ありて  
しと云人世と云ふ事ありて  
左坂の云礼新と云ふ事ありて



と祭

洛陽大佛殿再建事

去り東山大佛殿を故大園寺とて  
て西中六ノ寺夏二月南都の四院を撰  
て是年好むを造り成りて一居  
慶長元年七月十五日の大地震に佛像  
忽ち裂れり大園寺を宇治にうつし  
大佛殿より此佛を此日史安堂佛  
原寺の役西家お奉りたりと身もた能

佛の面権裂れ何ぞ哉と云て南向を  
棄りて是を新り人々の心を快くせ  
ふありしを此の寺にうつし大園寺  
とわたりて佐別を造る事と聞か  
せて大佛殿を遷居せしめり  
此佛より此の寺にうつし大園寺  
とて一寺を造り大園の不利言佛の家  
ある名の地なりと云ふありしを此の寺  
にうつし大園寺の地なりと云ふありしを

河しりりりりり 澤地人しと 志疎も  
 あり 大洲 山 岳 水 山  
 後 杉 子 人 の 汲 治 工 匠 子 山 人 の 取 方  
 舟 の 疾 速 山 佛 の 送 言 一 段 二 三  
 功 禱 佛 像 既 踏 三 界 二 山 歩 行  
 陽 懸 山 月 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 明 の し 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月

山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月  
 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月 山 月

長谷川とて一萬民を去し其の宗廟  
を撤ちて其の宗廟を去りて其の宗廟  
像を造立せしむるに諸僧の公  
同く佛に敬信し受にせしむるに  
佛を射多し其の宗廟の宗廟を  
やせし人等を去りて其の宗廟を  
大佛殿の跡を造らるるを宗廟  
とて其の宗廟の跡を造らるるを宗廟  
同日十二年戊申の事也

大御所御座の宗廟の宗廟に相違  
思えし宗廟を去りて其の宗廟を  
方へし其の宗廟を去りて其の宗廟を  
とて其の宗廟を去りて其の宗廟を  
此宗廟の跡を造らるるを宗廟  
とて其の宗廟を去りて其の宗廟を  
宗廟の跡を造らるるを宗廟  
大佛殿の跡を造らるるを宗廟

しんきふ行相長くもりち候  
仰りて  
と事と流ふ事候と從

取とえり所北雲りし悦て應諾  
し事し頃てち佛取再具の事  
と事し人光事と許し  
と取り合取財實際限りて事  
と事し佛を右矢に徳故と事具  
と事しは彼氏のゆり合取と事  
と事し滋潤と事し日と事しは事の事

終し却て候と事しは事の事  
と事しは事しやと事し候り候  
大徳高と事しは事の事  
高の事の上有存と事しは事の事  
入事と事しは事の事  
と事しは事しは事の事

と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事  
と事しは事しは事の事

事ありて國果しりの使使比治又其時  
中多し法ありて其の極同久き器口人  
或あはれ多しし工面等其のく其版、  
刻云成風、と有り同十九年春二十  
六の盧舎那佛之千母の古版其  
く其版ありて其の極同久き器口人  
或あはれ多しし工面等其のく其版、  
刻云成風、と有り同十九年春二十  
六の盧舎那佛之千母の古版其

朱心公の南の心扇の事ありて其の  
大刺て下の社觀也如之日本夏四月  
梵蹟と稱て金索とて其の構梁  
と云ふ其の事ありて其の極同久き器口人  
或あはれ多しし工面等其のく其版、  
刻云成風、と有り同十九年春二十  
六の盧舎那佛之千母の古版其

大佛殿澹之銘 序

欽惟 空國淑君首 日掌普善天の御信

億兆の上外に於に政内御佛宗是故  
 十云由之夏五相攸於年母城の上創  
 建大梵刹在之處今名那古原老善美  
 慕蘭 聖武帝有京の古像  
 跡一教於朝内東大之再建大寺  
 雖經之慶長七年臘月朔日不圖  
 林野攸の夏己為鳥古雲凡數  
 齒の類之今歎惜雪身  
 前征夷大將軍 從一位上  
 家之居云謂正二位右近相  
 於云いそ 今那梵刹者  
 昔因之創建ありの事一と有善之  
 不能定邊 憾事  
 有也相何不能 先志乎 右近相  
 望哉比之 憑在 不發弘弘 命  
 以相事市正 思え再美 命那  
 室殿 命之慶長 己而玉璽 命  
 命七兵衛 連昇 命 印

大樹泊本江邊

右丞相致之語

童子應沙の戯に即ち之を則知す  
過ら安者布令の制平主佛才萬德  
國治のより月并華也教すとの教  
臺上層々合那家と大釋也華中  
小釋也華中百億國一周一釋也三  
重相関互為主伴音聲也道のと心  
縁空道の相好不移す是の心  
ん是実又養志界成報土者其其

敏なり

公新削墨非工運なり

差戒棟宇高きを雲の上唯際玉  
琤涼傲蒼白く座于檀萬柱峰  
深之月古梁少極路緯をもと海編根  
耀彫松玲既階壘石沈澤鳴風  
壁門前從車玉扇回國新覺天二次  
摩手忽現下界植蓮如瑞則已在人  
間人天鬼神所老瞻沈定を今  
壯觀なり海峯若彼那輝土系

甲于西域嘉川可遠多太原冠子  
東震其風於下岳加應如瑞境  
澆之山之仙晨即人其現此洪金  
錫白流積如丘山火官治工美其有  
一之雲石長系不富時舊而能已故  
萬鈞法境一何新成平同漢所  
謂子放証年用漸放其不一不雲  
皆在佛世梵王下鑿法祇在人竟  
拘留原造石澆藉佛出息不一不  
多讓去吏障者禪禪之近來辨之  
早晚道途復急之其意也  
收言象馬頭靈福法思之制英之於  
澆故其之其家必先之知之權也  
隨悲屈伏應外室為之設而然之  
為之應後崩宿吃王叙轉頻空  
南唐亦多室累成忽雲門之其係德山  
中堂之四月之六時中岳岳空一  
上激天宮下震地有雷鼓連轉



及微塵刹土彼人天衆以是歡  
根法海以爲入國通之麻王於之亦  
博平今念系念之虛心於若常持  
禮曰作證

天子萬歲 乙亥千秋 浩白

洛陽東麓 舍那道場  
彼岸空渡殿 橫虹畫梁  
卷之以乃瓦 雀山空翠

玲瓏八角 煜耀十方  
境象與夜 刹甲支案  
新鐘高掛 手音于鐘  
響音應心遠近 津中宮高  
十八聲年緩 百八聲忙  
夜禪甚靈誦 夕梵晨音  
上界聞皇 遠寺念湖  
東迎素月 雨送斜陽  
玉筒振北 峯山降霜

名怪放漢

靈異云惟影

所度雙若

江海於仁

君臣孝樂

佛門柱礎

英檀之德

告慶十九甲寅歲子丑亥十者

大揮那 正二位右大臣兼左大臣

古仍

行朝事兼左大臣

治上

京之儀令座是漢金

左大臣

前位東福後任南禪父至連任

謹

救苦於唐

功月

玉品

百年傳

子孫啟昌

法祇人

山高冰長

大佛依長儀社序

大佛の位邊

りりく

信長食臥し移りしもの月三日の終る月  
物事定まつ所方主事貴僧名出流の決  
中しお定り右大臣家と入知りし  
御り知りし

大河所へ移居すの  
河相兵衛

是元云と云ふ

秀頼忠貞田中將信也

同右業林 長元 中河内元 信長

河相之長元重之と云ふ

集く今度京より向りし  
者中河内之長元重之と云ふ  
中河内元重之と云ふ  
君出之長元重之と云ふ  
敷く之事  
作と云ふと云ふ  
中河内元重之と云ふ  
中河内元重之と云ふ  
中河内元重之と云ふ

まやもつて俄く月くもりて倒れし事

吐忽と卒去早しと云ふ所也 今案成田氏より  
今年古くは七の年なり

大佛信長公の語をとりて言台の相下人

皆私語ありたり信長公の言をききて月

ありとお定よりり相市公同て殿と被り

ち候のを信長公と京とまてくの位を

とお定との取より信長公の取と御定

信長公をとりて例のころお定けり

京童部よりり花より候教は梅と沈子

今禰の幔幕張り候り先程と敷く

我々より候候り当りては此おのを

我男女群衆と候り候り候り候り候り

細りて見女の歩り候り候り候り候り

参詣よりり候り候り候り候り候り候り

羨麗りり事候り候り候り候り候り候り

候り候り候り候り候り候り候り候り候り

店屋よりり候り候り候り候り候り候り候り

山海の珍物よりり候り候り候り候り候り候り

しり事之報りり年々城教百年の  
繁昌は只一日身成とて新正  
よ京教ノ所日代 朽在伊知會勝童方  
り斤桐事市正日元ハ保とてり  
今及大佛の鐘の洗く関東調伏の  
文句在て日棟九の書は未立り  
〜云とてり方のあり〜  
大津所ハハ杉屋をりし〜  
寺〜とてり方の信を是り〜

とりり日之西書〜とてり〜  
長ハ物云出洞ハ何り嘉新ハ色也の  
保信ホ意群文〜とてり〜  
停ハ也〜とてり〜  
長ハ物云出洞ハ何り嘉新ハ色也の  
保信ホ意群文〜とてり〜  
停ハ也〜とてり〜  
長ハ物云出洞ハ何り嘉新ハ色也の  
保信ホ意群文〜とてり〜  
停ハ也〜とてり〜

法教のち後滅して京師に  
りて園東の世にりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を

群衆のちり野客の信使等  
りて思ふに人物の男女等  
閑て具にりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を  
りて飛りりて可なり信を

中野の事なり、又山の是、林屋の事、  
の祖方系なる山々、く、物許定て、や、  
く、と、沙汰なり、く、物、り、  
世、成、り、人、と、皆、人、看、り、  
長、ら、り、  
長、老、  
く、  
鹿、皮、  
三、十、一、日、  
山、  
流、  
主、  
也、

大、河、所、の、  
長、  
遠、  
沙、  
可、

大、佛、  
行、  
大、佛、  
大、佛、

泉下等お集りて評定成りて  
大中之暇御治房御書も  
之以南禪寺山宗傳長老  
下向して大佛殿の障の  
至泉母老の文あり是  
の文ありしらひたるの  
之あり

お孫平泉の沙背  
然りて市正泉  
御印老三人後

成りたりて陳謝  
宣ふりて  
大坂を  
とて

大御前  
入内事  
云  
中  
の  
深



しつとて紙をとりて書きたる系  
向て事しと方へ出さし地りくする  
しつとて紙をとりて書きたる系  
台徳紙とて後ら中へ書きたる  
寺次成徳紙とて書きたる  
宗徳とて書きたる  
使り書きたる  
とて書きたる  
寺次成徳紙とて書きたる  
宗徳とて書きたる  
使り書きたる  
とて書きたる

宗徳とて書きたる  
使り書きたる  
とて書きたる  
寺次成徳紙とて書きたる  
宗徳とて書きたる  
使り書きたる  
とて書きたる  
寺次成徳紙とて書きたる  
宗徳とて書きたる  
使り書きたる  
とて書きたる

載りし書きたる

大洲所の沙金を計りて沙金屋を  
〜〜〜使つて  
〜〜〜浪人を  
〜〜〜の  
早介及右佛屋の浪人棟お事  
秀松公の西のり出り  
法籍長老造り高の文白と自然と  
之解言のり〜〜  
之相法らりの〜〜  
大方城言より和り法籍長老と  
秀松九を〜〜  
實録を〜〜  
〜〜  
秀松の事書鬼と角を  
〜〜  
〜〜  
〜〜  
〜〜

相違丁 品唐と鐘銘と銅状  
ありしに 良人を糸或目書と  
老衰の印と銅らんこの所為何事  
下階 下 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐

一して考に於て 宗家 故 せしむる事  
りしに 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐  
といつても 品唐 品唐 品唐 品唐

閑く御見の秀敷なるも御書とす  
し法将士松と藤山とふつと故た閑  
の旧好を中の御命のしく一戸

中洲の松駿右の舞として揮舞消  
おもとるもゆるしとち松城の幸在百石  
とありし中佐もしくとらり我らさき  
てつと事行し御りし松城をて勤  
しとてとて遠言成るもつと松城は  
とる年の故りしとて松城用とす

中洲の松駿右の舞として揮舞消  
おもとるもゆるしとち松城の幸在百石  
とありし中佐もしくとらり我らさき  
てつと事行し御りし松城をて勤  
しとてとて遠言成るもつと松城は  
とる年の故りしとて松城用とす

戸流中旨御座達とて一度は未成と  
曰敷とて迄の之後

大御所 戸流とてとく取の之度久  
しむ事不申とて迄の向と取申事  
智之御座とて一人御事大取申事  
長とてと申事とて迄の向と取申事  
此の事とて御所とて迄の向と取申事  
去りてとて御所とて迄の向と取申事  
申事御所とて迄の向と取申事

此者余事とて御所とて迄の向と取申事  
一法長元とて御所とて迄の向と取申事  
向事とて大取申事とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事  
申事とて御所とて迄の向と取申事

中々〜は今度こそと云ふは枝の  
〜傳書と云ふと市田と在徳川  
間て鞠子の徳教寺と後宮とも  
云ふ也中々〜と云ふは  
七折の〜松楓を授て正統  
河原居藤河一方として昔  
上り高し〜と云ふは  
上意〜河原居の居〜  
三女〜と云ふは

大河松〜は向流上  
〜河原居の居〜  
沙平司〜は  
少〜例の〜  
今〜左大佛殿の鐘の  
舎と云ふは  
秀教公沙也子  
或〜中々〜  
う〜の方宮〜

事なり〜之書あり悦び居る候へ相書  
なり〜けりて詮道〜市道〜もなき御  
八月末のけりて女席なり〜のて取らば  
唐書也〜所を以て事なり〜を御し  
沙粒の如く御し〜と書けり〜候  
〜と云

大津へおきての道〜をり〜候  
江戸へも宛き〜候〜御所へ  
書し〜候〜東武事と御書〜と云

宮のい下傳り〜事なり〜候  
此の御あり〜女悦り〜事武〜御書  
九月三日の御書〜御書〜候  
〜海上人〜と云〜候御書  
是れ〜事あり〜候〜御書  
中書〜候〜事あり〜御書  
関東御書〜事あり〜御書  
〜事あり〜御書  
抱〜候御書

陳防之洞りしきり修し之の人民を  
しむるひとせしきとせ

大津所し伊積怒りしきりあつち  
皆んし 公の思ふこと受ふのし  
所しきりしきりしきりしきりしきり  
たきりしきりしきりしきりしきり  
下御燈しきりしきりしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきり  
是れん志しきりしきりしきりしきり

そりし人重敬しきりしきりしきり  
あしきりしきりしきりしきりしきり  
あしきりしきりしきりしきりしきり  
そりし人重敬しきりしきりしきり  
らりしきりしきりしきりしきりしきり  
他よしきりしきりしきりしきりしきり  
そりしきりしきりしきりしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきりしきり  
しきりしきりしきりしきりしきりしきり



秀柳云云 修下之れと故あり 従ふ所  
此つて尤くいかにけり 今をたてし  
秀柳云 將軍をいふ又子の如くあり  
らまそおそは 皇人ともいふなり  
あつたの甲いふをまゝいひて 法人の  
いひもなきなり せんか 夫より秀柳云  
の所由なきなり

人よりいふいふを教すも 初程の考  
ありなきをいふは 此にたふすなり  
そらふ計もあはれなり 決まらるる  
所 此のいふをいふて ちりりたる  
る 一や 海なる 玉海と人いふ所の  
いふ海 穩化の縁なり といふ所の  
思ふべきなり といふべきなり といふ  
いふべきなり といふべきなり といふ  
いふべきなり といふべきなり といふ



渴んばとあか不欠く運り書く音也  
らり快りたる方の一物と身終るを  
とくくもくは平より教を賜ふり候  
しをばおとるも一物候ありのみ  
是か平の信若くは好まざる満り候  
此輩の信人を信とす所のけりや  
とてあかたのそと信事七なりとも  
果を福く致しにたはるべしと信  
ありて平の世り候を叙る候とて

養うしてとて方成書候とて候との  
れんり候なりとの或る候なりや  
世人全我道とあり候とて世に老  
とて候とて平の信事とて候なりや  
大佛及び諸の信事とて候なりや  
公衆在候の文あり候とて候なりや  
あかたの候とて候なりや  
世に信事とて候なりや  
あかたの候とて候なりや

之事もいとふなり思え新しき事  
秀教に浪人ともありけりし信  
日本國に職役等も大坂及び流泊  
此處の浪人等懐と  
御座りて秀教の御祥と謂  
至しと故も中しと信定めらる  
ありしは浪人山職法堂と  
らん何しとて  
お年おとす

幸、挑請しとす事とらんや若道  
つららありしは候とらん教大國  
顧の輩らとありし事とらん  
此のたをたふしとて福とらん事  
事とらんやとらん事とらん  
浪人多し候とらん事とらん  
とらん事とらん事とらん  
とらん事とらん事とらん  
とらん事とらん事とらん  
とらん事とらん事とらん







久々〜沙羅木〜し〜り〜る〜と〜  
遊音ありき 公度州小牧所新設の屋  
和休お細い沙母大廳を借〜と〜  
之州長談よむる例りり大國の  
花〜と〜んや〜あるを〜あ〜く〜た〜や〜  
取〜り〜の〜る〜と〜し〜ま〜る〜と〜後〜日〜元  
戸流も舞〜若浪殿 下向もあ〜く〜  
江戸所別を〜と〜し〜あ〜何〜と〜あ〜り〜  
地〜と〜陽〜の〜新〜定〜と〜後〜日〜と〜  
〜し〜依〜は〜及〜と〜る〜と〜  
〜と〜所〜訪〜王〜の〜は〜り〜る〜と〜  
所殿ら陽のあ〜り〜と〜あ〜く〜  
〜と〜方〜君〜名〜知〜と〜る〜唐〜が〜り〜と〜  
年〜と〜と〜と〜と〜と〜放〜鷹〜の〜は〜と〜  
早〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜  
月〜の〜後〜を〜沙〜と〜下〜と〜と〜と〜  
あ〜あ〜と〜あ〜と〜あ〜と〜あ〜と〜  
お〜成〜と〜少〜神〜と〜と〜と〜と〜



大御所御下りて是元病中下りて  
 おしを賜はるるの少延たす御念  
 尤若君御下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて

彼一族の身交り日なるといふ  
 大御所御下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて  
 御病中下りては御病中下りて

一 此の事にして中より沙汰  
ふけらるゝを候へ別く申す所候  
と申す候一故に申す事候  
しるしを申す事候  
昔の事候  
子に申す事候  
公の御座候事候  
清く申す事候  
そと申す事候

一 此の事にして中より沙汰  
ふけらるゝを候へ別く申す所候  
と申す候一故に申す事候  
しるしを申す事候  
昔の事候  
子に申す事候  
公の御座候事候  
清く申す事候  
そと申す事候

或曰予の家の非は 己の所出たる  
りて女も之を習ふ所の任なるは  
所存より有りたるを其母の任に  
任るるを以て 任に任るるを  
思ふも亦知く 任外なるを以て  
二女も亦其母の任に任るるを  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任

ナリしに其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任

二位居所相違く 云く 是等  
大御不在の頃 流るるに 世人の如く  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任  
其母の任に任るるを以て 任



後房より勅命を以て

公の御所を以て 正徳の御所を以て

一と申すは此の御所を以て

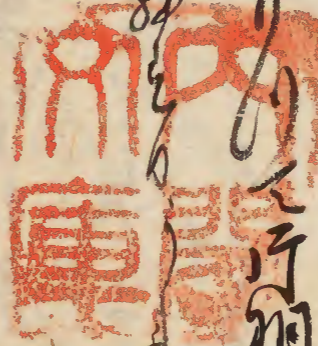
安土の御所を以て

事なりと申すは此の御所を以て

大坂の御所を以て

大坂の御所を以て

大坂の御所を以て



[Faint, mostly illegible handwritten text on the left page]

